

# 黒森歌舞伎 保存会だより

二〇一〇年  
三月三十一日号



▲ 女子児童による少年太鼓



▲ 来年の演目を決める「神饌の儀」



▲ 少年歌舞伎の後のインタビュー



▲ 井戸の水で身を清める、星川さん。



▲ 義経千本桜「釣瓶鮎屋の場」



義経千本桜「伏見稻荷鳥居前の場」▶

来年の演目は  
「一谷嫩軍記(いちのたにあたばぐんぎ)」  
今年も正月公演、酒田公演が無事に終了しました。3月14日には「大夫振舞」が行われ、来年の演目が「一谷嫩軍記」に決まりました。13年振りの上演となります。今回は、一座の星川辰也さんが選者になりました。

特別寄稿をいただきました  
ので紹介します

## 「継承」の力

佐治ゆかり

(福島県立美術館主任学芸員)

私は、15年ほど前から、特に黒森歌舞伎の衣裳の調査をきつかけとして、黒森の皆さんにお世話になっていきます。以来、黒森に行けない年でも、2月の芝居の頃には酒田の天候が気になったり、妙にそわそわしてしまいます。

黒森歌舞伎のどこに魅力を感じるかは人それぞれですが、私自身は「継承」の力を実感できるどころだと考えています。「引き継がれることに注がれる力」、「引き継ぐために、新たに生じる力」創造力」を実感できる、この二通りの意味で、黒森歌舞伎は私にとって特別な存在です。

初めて見た黒森歌舞伎の演目は、平成7(1995)年の「時今桔梗旗揚」ときはいまききょうのはたあげ」、通称「馬盟の光秀(ばたらいのみつひで)」という鶴屋南北作の時代物でした。織田信長が明智光

秀によって討たれる本能寺の変は、今も謎の多い事件といわれていますが、「時今…」は、光秀が本能寺で反旗を翻すに至るまでを、信長との様々な確執や心理描写によつて、巧みに描き出した作品です。中央の歌舞伎ではほとんど上演されることのない演目ですが、実はとても魅力的な人間ドラマです。ぼさぼさと雪が落ちてくる「絶好の」黒森歌舞伎日和で、寒さに震えながら、役者の熱演を必死で見ていたことを覚えています。



佐治ゆかりさん(左)とイガ・ルトコフスカさん。  
イガさんは、ワルシャワ大学から東京大学大学院へ留学中で、佐治さんがいた研究室に所属し、歌舞伎の研究をしています。

この時の武智光秀役は公志さん

んでした。品のある大きな演技が、光秀という人物の人格と悲哀を存分に表現しており、とても印象深い舞台でした。現在、公志さんは豊竹公志太夫と名乗り、黒森歌舞伎の義太夫の中心的存在として厚みのある語りを披露しています。

役者や舞台進行を経験した人間達だが、太夫や振り付け、座の運営などに携わるようになり、若い世代が華やかな役者として存分にその美しさをアピールする。こうした個々人の役割の変容をみるにつけ、黒森歌舞伎という存在は、じりじりと少しずつ担い手をスライドさせながら、経験や価値観を継承してきたのだと思います。

私の座との関わりは、専ら衣裳に関するものが中心ですので、衣裳や鬘を担当する方々との交流が自ずと多くなります。歌舞伎の表舞台で女性の姿を見ることはほとんどありませんが、実は多くの女性陣が、座の活動や舞台を根幹で支えています。真夏の衣裳の虫干し、芝居弁当の準備、芝居当日の楽屋の多忙さ、人によつては、舞台をほとんどみることもできません。それでも女性たちはてきぱ

きと役割を果たし、生き生きとした表情で座を盛り立てています。

歌舞伎と直接関わらなくとも、舞台上に上がることがなくても、皆が地域の大事なサイノカミ行事として歌舞伎を見守り、幼い頃から身体にしみ込むように季節の節目として経験する。これが黒森という集落にとつての歌舞伎の存在なのだと思えます。

芝居が芝居という特殊な時空に終始するのではなく、地芝居という姿を借りて、様々な形や段階で人びとの人生に作用し、価値観を形成する存在。黒森歌舞伎の意味は地域に於ける「継承」の力、地域の創造力そのものだということ、を、歌舞伎をみる度に実感しています。

### ●黒森歌舞伎保存会事務局●

T998-0044  
山形県酒田市中町一丁目4-10  
酒田市教育委員会文化課内  
電話・0234-261577

※4月から住所・電話が変わります  
T998-0034

山形県酒田中央西町2-59  
酒田市教育委員会社会教育課内  
電話・0234-2412994

黒森歌舞伎への意見・ご要望、公演の感想などをお寄せください。今後の参考にさせていただきます。